

<学会参加記③>

ARSA2007@三河 参加記

倪卉

ARSA(Asian Rural Sociological Association)、アジア農村社会学会 2007 年大会で報告する機会を得た。今回の大会は私の実家の北京周辺・河北省三河市で行われるので、とてもいい機会だと思って挑戦してみた。しかし、ARSA2007 直前に中国雲南省や広西での現地調査の予定もあって、随分忙しかった。8 月 4 日に調査地の雲南省から北京の実家に戻って、荷物も殆ど整理せずにそのまま 8 月 7 日からの学会に出ってしまった。

ARSA2007 年大会の主旨や内容などについてはホームページ(<http://www.arsa2007china.com>)に中国語及び英語で詳細に紹介してあるので、参照して頂きたい。報告者個人の視点から今回の学会の見聞や感想などを日記の形で紹介していこう。

【2007 年 8 月 7 日(一日目)大会の受付】

当日の午後三時に、北京市内の社会科学院の正門から、学会会場となる河北省三河の福成名厨酒店というホテルまでのシャトルバスに乗って、会場に着いた。

車で約一時間半掛けて、やっと会場に到着した。正面玄関に受付所に既に到着した参加者たちが並んでいた。受付では会費を現金で払わなければならない、シャトルバスから一緒だった高橋明善先生はドルのトラベラーズチェックしかもっていないなかったため、銀行で現金に両替したいと言われた。私は通訳として同行することにした。ちょうど付近に中国銀行があったが、トラベラーズチェックもクレジットカードも取り扱えないらしい。しょうがなくホテルに戻って会費は後日払うことにした。北京の近辺地域とはいえ、まだ現金の時代にどまっているなと感じた。

【2007 年 8 月 8 日(二日目)学会報告】

今日は私が報告する日だ。午前中の開会式と講演会をさぼり、ホテルの部屋にて報告の練習をしていた。配布資料のコピーをしたくて、ホテルのビジネスセンターという所を尋ねてみた。コピー機にパソコン、プリンタが一台ずつ置いてある。値段を聞いてみると、A4 用紙で 1 枚 1 元とかなり高めだ、北京市内なら一枚 0.2 元ですむのにと後悔してしまった。

午前中の講演会が長引いたため、昼食時間も遅れた。ご飯は丸いテーブル一つに 10 人が揃わないと始まらない。そして、暖かい料理は学会参加者全員揃わないと始まらないため、1 時過ぎにようやく暖かい料理

が出されたが、私は 1 時半からの報告の準備のために早々と部屋に戻らざるを得なかった。

1 時 20 分過ぎ、慌てて報告の会議室に行ってみたが、一緒に報告する黒柳先生と池上先生しかいなかった。10 分後、中国人っぽい人や、東南アジア系の人や、欧米人が続々と部屋に入ってきた。小さい会議室なので、既に立って聞くつもりの人がいた。セッションは「農村経済」というテーマであり、司会の先生は日本人だった。コメンテーターはオーストラリア人の先生だった。私は第一報告だ。初めての国際学会で、しかも英語で報告するため、ちょっと緊張気味だった。報告時間は約 15 分であり、報告後に、インド人やタイ人や日本人、そしてオーストラリア人研究者から質問がたくさん出た。予定終了時間より大幅にオーバーしたが、なかなかいい質問が多数あった。

私の蚕糸業の産地移動の報告に対するオーストラリア人研究者からのコメントは、「とても面白く有意義な研究である。そして、現在の中国国内の蚕糸業産地が更に東南アジアへと国際展開していく可能性について、中国は責任をとらないといけないのではないか」というようなものだった。

その日の夜は歓迎晩餐会だった。嬉しいことに、私はコメンテーターを務めてくれたオーストラリア人研究者の隣に座ることになった。晩餐会が始まる前に、お互いにあらためて自己紹介をしたところ、彼は環境問題と社会学を専門とする研究者であることがわかった。自分と同じ研究分野の研究者だけではなく、関連する色んな分野の研究者と交流できたことは大きな収穫となった。

同じテーブルに、日本人やタイ人、ベトナム人とインド人もいた。晩餐会の約 2 時間の間、皆でお箸の使い方、そして中国料理と中国のお酒について楽しく語り合った。

【2007 年 8 月 9 日(三日目)農村見学】

朝 8 時過ぎ、バスに乗って出発した。バスは三台で、タイやインド、カンボジア、ベトナムなど東南アジアからの人で一台、日本人で一台、中国人とその他の国の人で一台という編成だった。

主催者はまず「南巷口」という村に案内してくれた。この村は四、五年前から大型工業区の建設のため、土地を香港人投資者に貸し出して、年間何百万元の地代収入を得ている。一行は建設中の工場を尋ねてみた。まだ午前中なのに、日差しが強く、地面から反射した熱に焼かれるようだった。その後、馬起乏という村の小学校にも行ってみた。

午後、私たち一行は二軒の牧場を訪れた。一軒目は乳牛の牧場である。経営者は中国系アメリカ人だった。生産したミルクは全部北京市場に提供しているな

ど面白い話を聞くことができた。私が北京市場で見た牛乳は内モンゴル産が多数で、北京周辺産のものは少ない。今度、北京でこの牧場の牛乳を探してみよう。

二軒目は肉用牛の牧場である。牧場の外に、トラックで飼料用のトウモロコシを売りにきた農民たちが並んでいる。白黒の乳牛と違って、牧場の中には黄色い牛がいた。この牧場の経営者は滞在しているホテルの経営者と同じグループだそうだ。牧場の責任者のおじさんが詳しく牧場の経営状況と牛の飼育管理方を紹介してくれた。訛りから判断すると、このおじさんは現地人のようだ。

最後に、ホテル付近にある大豆油の製造工場を見学した。時間の都合で、工場の中まで詳しく見学することはできなかった。工場長は大豆を貯蔵する巨大な金属タンクのそばで、工場の状況を話してくれた。明らかにこの工場長は北京人であった。タンクの後ろに鉄道のレールが見えた。工場長の話によると、その鉄道は中国北部から大豆を運送する為のものだそうだ。そして、この工場の原料大豆の約半分がブラジルなどの海外からのものであるそうだ…。

夜見たニュースで、その日の北京地域はこの夏一番の暑さであり、一部地域では40度を越えたという。

【2007年8月10日(四日目)最終日】

午前中のシンポジウムは開会式と同じ会場だったが、開会式の満員状態に比べると空席が目立った。中国社会科学院・牛鳳瑞先生の「都市化は中国農村を発展させる唯一の道」という報告を聞いて、昨日農村見学で見てきた、耕地が消えて、代わりに工場や高層マンションが立ち並ぶ南巷口村のことを思い出してしまった。中国農村の将来に少し不安を感じた。

その後の、朱玲先生による農村健康及び医療状況についての報告は印象深かった。朱先生が中国語で報告の途中、突然ステージ周辺に停電が起きた。Power Pointのスライドを映すスクリーンが真っ白になった。ステージ周辺の電気も消えて、英語の同時通訳者のPCを含め会場のPC全てが使えなくなった。朱先生はすぐに会場の真ん中に移動して、電気が回復するまで、大声を出して英語で報告を続けた。

午後も個別報告があった。歓迎晩餐会で知り合った日本からきた中国人留学生の報告を聞きに行った。同じ会場でその後の報告も聞きたかったが、報告者は欠席だった。次に聞きたい報告は別の会場にある。報告と報告の間に間隔がないため、急いで駆け付けた。

欠席した報告者は中国人研究者が多かったそうだ。ARSA2007の計画段階では、中国語セッションを組むことになっていたが、開催直前に中国語セッションが取り消された。そのため、中国語で報告するつもりでいた報告者が欠席することになったそうだ。国際学会はこ

のような言語問題を体感するいい機会かもしれない。

夜は送別晩餐会だった。真ん中の貴賓席を除いて、周りのテーブルに、参加者は皆きれいに国と地域ごとに分かれて座った。晩餐会の最後に韓国からきたChung教授は来年ソウルで行うIRSAの世界大会を紹介して、来年またソウルで会おうと挨拶をした。

【2007年8月11日(五日目)】

朝早く、北京市内に戻る日本人先生たちのタクシーに相乗りさせてもらい、北京市内の実家に戻った。

次に、国際学会に参加して気づいた点を総括にかえて述べておこう。

【一、国際交流、多分野多学際間交流について】

よく国際学会で国際交流ができるといわれる。ARSA2007に参加してから、確かに色んな国からの研究者に出会うことができたとおもう。しかし、残念ながら、一遍に出会う人が多すぎて、結局お互いに名前や研究分野を紹介するぐらいしかできなかった。①タイミングの問題がある。実際に、朝から講演会、午後から個別報告があって、新しく知り合った研究者と話す機会が少ない。一日三回の食事タイムはお互いに交流できる一番いい機会であった。②参加者が学会に単独で参加するかグループで参加するかによって状況が異なる。それに加えて、③言語の問題がある。同じグループは通常同じ言葉を使用している。仮に単独の個人でも、同じ言葉を使用するグループや他の個人と新しいグループを組むことになりやすい。学会も二日目を過ぎると、食事のテーブルでも、講演会の席でも、タイ人系グループと日本人グループと中国人グループと他の東南アジア系に自然にわかれてきた。私は中国人だが、日本語も話せるので、日本人研究者グループに吸収されていた。同様に通訳を担当していた若い中国人院生の女の子たちと話すこともできた。私は一人で学会に出席したが、オーストラリア人研究者ととても仲良くなって、食事もよく隣席だった。彼も一人で参加していた。

特に、三日目の農村見学の際に、主催者が用意してくれたバスは3台で、参加者たちを国と地域ごとに分けるバスの乗り方はこのグループ分け現象を一層明らかにしたように感じた。

研究者たちでさえ、国や地域や言語で線引きされていることは残念ながら事実である。むしろ、国境や言語で別れているからこそ、多様な社会が生まれたといえる。そのことが研究の多様性をも生み出しているのだと実感することができた。

【二、主催者と学会運営について】

ARSA2007の主催者は中国社会科学院の都市発展・環境研究センターである。当然、都市問題や環境

問題を専門とする研究者が多いと考えられる。私ははじめて農村社会学会に参加するが、本学会は農村農業問題を中心にしていると思っていた。実際に、農村見学で三河の農村を見ることもできた。しかし、訪れた農村は想像と異なっていた。南巷口村は道の両側に工場や高層マンションが立ち並び、中国でいう“新农村”的な光景が続いていた。村民は既にマンションに住み、バイクに乗り、都市戸籍になったと村のリーダーは自慢気に語っていた。移動の途中には、トウモロコシ畑や工場、高層マンションが目立つ。北京周辺に立地しているせいか、昔の田園風景が見当たらなかった。

学会四日目のシンポジウムの内容は印象深かった。報告は農村の都市化を評価するものだった。報告者

は「中国の農村問題を解決する唯一の方法は都市化である」と断言していた。そのとき農村見学でみた南巷口村のことを思い出した。この農村見学は主催者の主張の裏づけになっているのではと感じると同時に、中国農村の将来が心配になった。

私はまだ学会参加の経験は浅い。しかも今回は初めての国際学会である。大会テーマに沿って、学会運営が進められることは当然だが、しかし、そのテーマ設定に主催者の意図が大きく介在しているように感じた。今後、学会に参加するにあたって、研究者との交流や最先端の研究成果に触れるためだけでなく、大会の背後にある学会の主張を知ること有意義であるかもしれない。

(京都大学大学院)

研究活動報告 I

大学院ゼミナール

【地域産業分析】

2006年度後期

宮本憲一『社会資本論(改訂版)』有斐閣、2001年の購読
研究報告

2007年度前期

サスキア・サッセン『労働と資本の国際移動』岩波書店、1992年の講読

【国際農業分析】

2006年度後期

J. Martinussen, *Society, State & Market: A Guide to Competing Theories of Development*, Zed Books, 1997の講読

2007年度前期

J. Martinussen, *Society, State & Market: A Guide to Competing Theories of Development*, Zed Books, 1997の講読

【経済学古典研究】

2006年度後期

K. マルクス『資本論』第1巻の講読

2007年度前期

K. マルクス『資本論』第1巻の講読